

【今日の説教から】

いよいよピリピ書も最後の章になりました。有名な、懇め深い次の箇所が登場しました。
「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。

そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。」

私たちは容易に心配し、不安になったり、気がかりになり、気をもみ、苦労し、懸念します。しかし私たちは神様を信じるように導かれた者です。むしろ心配に変えて、その正反対である感謝をささげることが出来ると聖書は語ります。私たちは私たちのために命を捧げるほどに愛してくださったキリスト・イエスによって神様に願うことが出来るからです。私たちは心の思いを、懸念を、痛みを、心配を包み隠さず神様にお知らせすることが出来ます。神様は聞いてくださいます。そして最善に導いてくださいます。感謝へと導いて下さいます。

ですから私たちは先んじていつも感謝の心を持つことが出来ます。

私たちの心、思い、態度、姿勢、考え方、意図、意志、目的、理解、識別力をはるかに超える神様の平安が私たちと共にあり、私たちの心と考え、精神、秩序、筋道、計画と構想を全て見守り、保護してくださいます。それがイエス様にある私たちへの尊い御心なのです。ですから私たちは満ち足りて寛容に、神様の前に価値ある生き方が出来ます。

皆様おはようございます。いよいよピリピ書も最後の章に入り、この書からのお話も今日を入れてあと3回となりました。最後の部分でパウロが私たちに何を語り掛けるのか、注目しながら読み進めてまいりましょう。

「だから」、私の愛し慕っている兄弟たちよとありますので、前の箇所を振り返りたいと思います。

3:20 しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。

3:21 彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう。

4:1 だから、わたしの愛し慕っている兄弟たちよ。わたしの喜びであり冠である愛する者たちよ。このように、主にあって堅く立ちなさい。

私たちの卑しいからだをご自身の栄光の体と同じ形に変えてくださる。低い、卑しい身分。ごく普通な、質素な、あるいは屈辱、恥をかく、面目を失うような事態。それは私たちが過度に私たちのことを卑下しているのではなくて、私たちは取るに足りない存在に過ぎないということを意味しているのかもしれません。あるいは、神様ご自身の栄光のからだと同じ

かたちと比較すれば、それはそれは取るに足りない低き卑しい身分だと言っているのかもしれません。私たちの居場所は最終的には天にあるのであり、私たちは私たち固有の定かならない、この身の至らなさと不完全との中でさんざん失敗し、恥をかき、面目を失い続け、屈辱を受けるごくごく普通な、質素な、好機というよりは低き卑しき身分と地位に過ぎませんが、来るときには天に居場所を頂いている私たちはついに神様「ご自身の栄光のからだと同じかたち」にされるということ、そういう身に余る栄誉を受けることが確約されているということは、何と興奮する、嬉しいことなのではないでしょうか。

だから、そういう境遇に置かれているから、主にあって堅く、揺れ動くことなくしっかりと立っていなさいとパウロは語るのです。

「わたしの愛し慕っている兄弟たちよ。わたしの喜びであり冠である愛する者たち」。そんな弱くもろい私たちでもパウロは「わたしの愛し慕っている兄弟たちよ。わたしの喜びであり冠である愛する者たち」と語ります。これが神様のご覧になられる味方です。

イザヤ 43:1 ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。

43:2 あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共におる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。

43:3 わたしはあなたの神、主である、イスラエルの聖者、あなたの救主である。わたしはエジプトを与えて／あなたのあがないしろとし、エチオピヤとセバとをあなたの代りとする。

43:4 あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛するがゆえに、あなたの代りに人を与える、あなたの命の代りに民を与える。

43:4 わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。(新改訳聖書)

ピリピ 4 章 1 節では、実に 2 回も「愛する、親愛なる」という言葉が繰り返され、「慕い求める」「私の喜び、冠」と記されてあります。

冠というときに、何か晴れがましい、栄誉を称えるオリンピックの表彰式のようなもの、またはもっと格式ある王の戴冠式のようなものを思い出しますが、その栄誉ある格式ある冠が私たちであり、パウロが喜んで私たちを彼の栄誉のしるしの冠として私たちを恥じることなく栄誉だというあたり、本当に彼の愛情深さが伝わってきますね。しかしこのような語り掛けは、神様の愛のメッセージとして、出エジプト記に書かれているのでした。

出エジプト 19:4 『あなたがたは、わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼に載せてわたしの所にこさせたことを見た。

19:5 それで、もしあながたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。

19:6 あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう』。これがあなたのイスラエルの人々に語るべき言葉である』。

申命記 7:6 あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた。

7:7 主があながたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの国民よりも数が多かったからではない。あなたがたはよろずの民のうち、もっとも数の少ないものであった。

7:8 ただ主があながたを愛し、またあなたがたの先祖に誓われた誓いを守ろうとして、主は強い手をもってあなたがたを導き出し、奴隸の家から、エジプトの王パロの手から、あがない出されたのである。

7:9 それゆえあなたは知らなければならない。あなたの神、主は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵みを施して千代に及び、

7:10 また彼を憎む者には、めいめいに報いて滅ぼされることを。主は自分を憎む者には猶予することなく、めいめいに報いられる。

32:9 主の分はその民であって、／ヤコブはその定められた嗣業である。

32:10 主はこれを荒野の地で見いだし、／獸のほえる荒れ地で会い、／これを巡り囲んでいたわり、／目のひとみのように守られた。

32:11 わしがその巣のひなを呼び起し、／その子の上に舞いかけり、／その羽をひろげて彼らをのせ、／そのつばさの上にこれを負うように、

32:12 主はただひとりで彼を導かれて、／ほかの神々はあずからなかった。

1ペテロ 2:9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。

2:10 あなたがたは、以前は神の民でなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたことのない者であったが、いまは、あわれみを受けた者となっている。

主にあって堅く立ちなさい。

4:2 わたしはユウオデヤに勧め、またスントケに勧める。どうか、主にあって一つ思いになってほしい。

私たちの信仰生活は足元が揺るがされることの連続なのだと思います。ぐらぐらと地面が揺らぎ、私たちは踏ん張り切れずによろよろとよろめく。右に左にふらつく。神様はここピリピで(使徒16章)、パウロとシラスを用いて福音の礎を固く据えてくださいました。占いの靈に取りつかれ、そしてその力をを利用して金儲けをしようとする人たちにがんじがらめにされた女性を救い、また、投獄された時、地は震え、牢獄の扉は開きましたが、囚人たちはパウロとシラスに現れた神様の働きへの畏れのゆえに決して逃亡せず、看守もまた神様の働きを見て家族をあげてイエス様を信じて洗礼を受けました。

揺れ動いても、困難に落とされても堅い土台である主にあって、その手の中で私たちは守られています。

そんな中、教会には懸念がありました。ユウオデヤとスントケという、二人の女性が仲たがいをしていたのです。両者とも優秀な働き手だったのでしょうか。それ故にいろいろな考えの違いが生じたのでしょうか。あるいはライバル心が働いたのでしょうか。教会の始まった最初は、共に未熟ながら支え合った仲に違いありません。しかし時が進むにつれて立場も異なり、考え方にも違いが生まれ、埋め合わせがたい差が生じて、その人間関係は修復不可能にも見えたのでしょうか。しかしパウロはそれを放置することを望みませんでした。

「どうか、主にあって一つ思いになってほしい。」

キリスト・イエスこそがご自分の尊い命を通して敵対している者同士を和解させてくださいました。すなわちそれは反逆の民、神様に敵意を抱いた私たちである民です。そして罪によって神様から遠く隔てられた私たちである民です。

エペソ 2:11 だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によれば異邦人であって、手で行った肉の割礼ある者と称せられる人々からは、無割礼の者と呼ばれており、

2:12 またその当時は、キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者であった。

2:13 ところが、あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近いものとなったのである。

2:14 キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、

2:15 数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、

2:16 十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にか

けて滅ぼしてしまったのである。

4:3 ついては、真実な協力者よ。あなたにお願いする。このふたりの女を助けてあげなさい。彼らは、「いのちの書」に名を書きとめられているクレメンスや、その他の同労者たちと協力して、福音のためにわたしと共に戦ってくれた女たちである。

パウロはこの手紙の中で、「真実な協力者」という人に対して、彼女たちの仲裁に入つてほしいと願います。キリストの贅いにあって「いのちの書」に名前が書かれ、同労者たちと協力して、福音のためにわたしと共に戦ってくれた女たち、そういう人たち同士がいさかいの中にあり続けることは、教会にとっては危機に値することでした。いくら教会の中だからと言って、意見の相違は仕方がないし、一度そのようなことになつたらもう修復はあきらめるしかない、そういう考え方もあるかもしれません。しかしキリストによって一つにされた教会にはそれは不釣り合いなのです。それは教会の教会らしさを著しく傷つけるのです。ですから、今日に至るまでこの二人の名前が私たちに明らかになることは彼らの名誉にとって傷つけられることとなるのですが、小さなわだかまりを超えてもともと素晴らしい働きをした人たちがその称賛の中、働きを全うして栄誉にあずかれるようにと、パウロはここに大胆にも書き送っているのだと思います。私たちが今日も教会の中で深く考えるべきテーマだと思います。

4:4 あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。

4:5 あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。

喜びなさい、喜びなさい！

この手紙にしばしば現れたメッセージです。

今私はあなたに言う、主にあって喜びなさい、そして今一度、私は再び未来においても言うだろう（未来形）、喜びなさいと。

喜び、これが私たちの信仰です。イエス様が、神様が教会に集う私たちに与えてくださるものが喜びです。今も、そしてこれからも、私たちは主にあって喜び続けることが出来るのです。

ですから、溢れる喜びと感謝との中で、私たちは寛容であることが出来るのです。穏やかで、柔らかな、緩やかな、優しい親切な、気配りに満ちた、我慢強く寛大で、思いやりがあり慎重で思慮深い者であることが出来るのです。主の来臨は近く、私たちの労苦の時が満ちようとしているからです。この終わりの時こそ、私たちは満たされた喜びと共に、私たちの満ち満ちた神様からの恵みに満たされた品性を明らかにしていくのです。争いやいさかいではない、私たちはキリストにあって一つなのです。共に喜びにあずかり、助け合って教会らし

さを醸し出していくのです。

4:6 何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。

素晴らしい恵み深い箇所です。

不安、心配、懸念。これらは無用と聖書は語ります。

私たちの日常生活にはこれらが満ちています。不安、心配、懸念。不安、心配、懸念。不安、心配、懸念。

朝起きて体調が大丈夫か。仕事は、地域は、人間関係は大丈夫か。私は職場や地域で足を引っ張られないか。後ろ指を指されてはいないか。会社は存続していくのか。家庭の経済は破綻しないのか。将来は安泰なのか。家族はそれぞれ無事に進んでいるのか。心を、思いを家族は一つにしているのか。バラバラになってはいないのか。過去のことが気にかかり、現在に懸案、そして将来に不安。しかし聖書は心配無用とはっきりと語ります。

ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。

祈りと願いを捧げるのです。心配している暇があるのなら、生ける神様に祈りと願いを捧げるのです。それが私たちの生き方です。不安に思っても仕方がありません。そしてかつては仕方のない、詮無いことを繰り返すだけの人生でした。しかし今、私たちは私たちを愛してくださる方にすがり願い祈る道が開かれているのです。このお方は私たちを愛し抜いてくださいます。必要なものを私たちに惜しまれる方ではありません。それは何という感謝でしょうか。そんな神様に、感謝と共に願い事を語ることが出来る。喜びながら、信じながら、期待しながら、喜んで神様に願うことが出来るとは、何という幸いでしょうか。

恐る恐る近づいて、どうぞ怒らないでください、私は何度も何度もあなたにお願いしているのにあなたは何も答えてくださらないではありませんかと、恐れと悲しみと不信とによって願い事を、どうせ駄目だろうと思いながら独り言のようにささやくのではなくて、私たちは感謝をもって愛に満ちた神様のもとに、喜びと感謝とをもって近づき、願い事を、期待と感謝とをもって捧げることが出来るのです。どうして私たちは神様がおられないかのように不安がったり、心配したり、心を沈ませることがあるのでしょうか。

4:7 そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と願いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。

人知。人知。これが曲者なのです。人知が何でありますか。人の知恵が何物なのでしょう

うか。「人知」。この言葉は次のような意味があります。

私たちの心、思い、態度、姿勢、考え方、意図、意志、目的、理解、識別力。

人知に長けているということ。これは素晴らしいことです。心にも思いにも優れている。態度、姿勢、考え方が素晴らしい。意とも目的も、意志も優れている。素晴らしい理解力と識別力を持っている。こういう人は成功するための条件を持ち合わせているということが出来るでしょう。

しかし神様の知恵はこの「人知」、人の知恵に遙かに勝ります。そのいつくしみと愛と力とに満ちた神様から来る平安。心の安らぎと神様の赦しに基づいた平和。これこそが私たちの心と思い、精神、秩序、筋道、計画と構想を全て見守り、保護してくださるのです。神様は私たちの人生に筋道と構想を、デザインを持っておられます。私たちの人生も、私たちの心も思いも、神様によって守られています。感謝です。

4:8 最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。

4:9 あなたがたが、わたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことは、これを実行しなさい。そうすれば、平和の神が、あなたがたと共にいますであろう。

結局のところ、神様を求め、信じ、学び、感謝をもって願いを捧げ、導いていただくということがすべてなのです。すべて真実、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するもの、それらはすなわち神様のことであり、神様からあふれ出るものです。

それら学んだことを実行しなさい。聞くだけであってはならない。知っているながら知らないがごとくにおろおろしたり、力なく歩んではならない、イエス様にあって堅く力強く立ち、歩きなさい。わたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことは、これを実行しなさい。そうすれば、平和の神が、あなたがたと共にいますであろう。

主の恵みと平安、満たしと守りのうちに導かれ、今週も力強く証し人として、私たちの寛容な愛の心を示していきたいと願います。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。神様が私たちの思

いを心の姿勢を、意図を、目的を、理解をはるかに超えて私たちの心を
思いを、人生の筋道を、構想を、計画を全て見守り、保護してくださることに、本当にありがとうございます。そんなお方の万全のお守りがありますから、私たちは広い、おおらかな、優しき寛大な気持ちで進むことが出来ます。私たちの人生を、良きもので満たし、希望を与えてくださいまして、本当にありがとうございます。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン